

で報告する. Dicopac キットは IF-⁵⁷ CoB₁₂ と遊離⁵⁸CoB₁₂ の両カプセルおよび標準液から成っている. この両カプセルを等量混合してゲル濾過を行うと IF-⁵⁷CoB₁₂ は殆んどが内因子の peak に一致し遊離 B₁₂ の peak への出現は10%以下であり遊離は内因子への出現を認めず純度の高いものであった. 症例の検討で悪性貧血では低いB₁₂排泄率が内因子結合 B₁₂ で正常域に近くなり intestinal malabsorption では内因子の有無にかかわらず低い吸収を示した. 他の貧血および対照群ではこのような異常を認めなかった. 悪性貧血1例の内因子抗体の検索では IF-⁵⁷CoB₁₂ のカプセルに患者血清を加えてゲル濾過を行なうと内因子-抗体複合体の出現と加える前に比し多量の遊離 B₁₂ の出現を認め結合抗体の特異な作用が確認された.

7. ラジオイムノアッセイ法による血中 Ligandin 測定の試み

赤沢 修吾 前口 邦雄
呉 禎吉 石谷 邦彦
(札幌大. 癌研内科)

肝細胞上清分画のビリルビンおよび色素結合蛋白である Ligandin の構造と Radioimmunoassay 法による微量定量につき検討を加えたので報告する. ラット肝および人肝 Ligandin の抽出は Arias らの方法に準じ実施した. 得られた Ligandin については ICG BSP との結合, 抗 Ligandin IgG との反応にて同定した. SPS-polyacrylamide ゲル電気泳動にてその subunit 構造と検討したところ分子量25,000, 23,000 の2つの subunit を認めた. Double antibody methodによるradioimmunosasayにて定量した正常人血清中の Ligandin 濃度は10~30ng/ml であった. 各種疾患のその血清濃度を検討したところ, 肝疾患において高値を認めた例が多く, とくに急性肝炎初期, 慢性活動性肝炎活動期で高値を示した. また悪性腫瘍の肝転移で全例高値を示した. 以上は肝実質障害における肝細胞内 Ligandin の血中遊離と考えられその肝細胞特異性より診断に有意義と考えられた.

8. Radio Immuno Assay による FDP の測定

及川 潤一 柴田 恵子
近江 直仁 新津洋司郎
漆崎 一朗
(札幌大・癌研内)

従来 FDP の測定法として Latex 赤血球凝集抑制反応および HIT 法が用いられているが, 反応の Endpoint の判定と微量定量に問題がある. われわれは FgE および FgD を抽出し, それに対する特異抗体いわゆる neo 抗体を作製し RIA 法による臨床応用を試みた. 方法; 人-fibrinogen を plasmin で分解し Sephadex G-200 ゲル濾過・カラム等電点分画により抽出した FgDP を家兎に免疫し抗血清を得た. fibrinogen を因相化した agfinity chromatography により fibrinogen に対する抗体を除き, 抗 FDP neo 抗体を作製した. RIA は2抗体法を用いた. 結果; 正常者の FgD 値は108~260 ng/ml/ FgE 値は60~120ng/ml/ で従来の HIT 法では測定不可能な低い値を実測値としてとらえることが可能であった. また Fg Enes 抗体を用いた assay system では血清中に残存する fibrinogen 値の影響を受けず, また血漿中でも EDP の測定が可能であった.

9. Secretin の Radioimmunoassay (R.I.A.)

太田 英勝 稲辺靖仁郎
藪内 信治 大原 弘通
(札幌大・一内)

Secretin の R. I. A. は分子内に tyrosin を欠くため標識が困難であること, 力価の高い抗血清が得られないことなどでまだ確定的段階ではない. われわれは合成 Secretin の analogues である 6-tyrosyl Secretin を用いてその R. I. A. に成功したので報告した. 標識は¹²⁵I-Na を用い Chloramin-T 法で行い Sephadex G-25, Quisso powder にて精製した. 標準 Secretin には Squibb の合成 Secretin を使用した. 得られた標準曲線の測定感度は100 pg/ml であった. 対照に比べて糖尿病, 慢性肺炎,